DB
15
1999
(3)

日本語の述語と文機能の研究

山岡 政紀

1999年11月

寄贈
山岡政紀氏

00003668

日本語の述語と文機能の研究

山岡　政紀

目次

序　本論文の目的と概要 ―― 1

第１章　方法論上の諸問題 ―― 6

１．０　本章の概要 ―― 6

１．１　形式と意味の関係 ―― 6

１．２　時制辞と時制意味 ―― 8

1.2.0 本節の概要

1.2.1 日本語述語形態素の中で時制辞が占める特殊な地位

1.2.2 日本語の述語形態素の体系

1.2.3 非過去時制辞とその時制意味

１．３　人称形式と人称意味 ―― 17

1.3.0 本節の概要

1.3.1 人称形式の表れ方

1.3.1.1　語彙的人称――日本語の人称代名詞／ 1.3.1.2　統語的人称――印欧諸語の「人称」範疇

1.3.2 人称形式から離れた人称意味――語用論的人称

1.3.2.1 人称詞の意味決定／ 1.3.2.2 無形式の人称意味

1.3.3 文機能・発話機能と人称意味

1.3.4 人称と相互主観性

1.3.4.1　言語現象学と認知科学／ 1.3.4.2　相互主観性の言語的反映としての人称／ 1.3.4.3 自然言語における第３人称の消極的位置

１．４　格助詞と意味格 ―― 27

1.4.1 形式格と意味格

1.4.2 諸言語の形式格と日本語の格助詞

1.4.2.1 諸言語の形式格／ 1.4.2.2 日本語の形式格としての格助詞

1.4.3 意味格を用いての構文分析

1.4.4 二重の格と動作主格

1.4.5 形容詞文の意味格

1.4.6 部分ガ格について

1.4.7 対象格という用語について

１．５　情報帰属理論による形容詞論と主題論 ―― 42

1.5.0 本節の概要

1.5.1 経験の帰属空間と形容詞分類

1.5.1.1 内的経験空間と感情形容詞文／ 1.5.1.2 外的経験空間と属性形容詞文

1.5.2 情報帰属理論による主題論

1.5.2.1　外的経験空間内に導入される主題空間／ 1.5.2.2　命題の背後にある主題としての空間／ 1.5.2.3 対比空間の導入／ 1.5.2.4 助詞ハ・ガと空間との関係

第２章　文機能論と発話機能論の全体像 ―――― 52
２．０　本章の概要 ―――― 52
２．１　発話機能と発話内行為 ―――― 52
2.1.1 発話機能論に関連する諸理論
2.1.2 Searle の発話行為論について
2.1.2.1　Austin と Searle ／ 2.1.2.2　Searle の発話内行為の五分類
2.1.3 発話内行為から発話機能へ
2.1.4 本研究における行為の理論的枠組み
2.1.5 まとめ
補注 発話内行為分類の日本語訳について
２．２　〈文機能〉と《発話機能》 ―――― 66
2.2.1 文が機能する二つの段階
2.2.2 〈文機能〉の類型
2.2.3 《発話機能》の類型
2.2.4 適切性条件の関与するレベル
２．３　日本語モダリティ論と文機能論 ―――― 76
2.3.0 本節の目的
2.3.1 日本語モダリティ研究史
2.3.1.1 山田孝雄から芳賀綏まで／ 2.3.1.2 三上章と寺村秀夫／ 2.3.1.3 上野田鶴子／ 2.3.1.4 奥田靖雄と鈴木重幸／ 2.3.1.5 仁田義雄
2.3.2 モダリティ論から文機能論へ――人称指定の本質――
2.3.3 モダリティ論から発話機能論へ
２．４　日本語の〈文機能〉の概観 ―――― 91
2.4.0 本節の目的と概要
2.4.1 〈遂行〉
2.4.2 〈表出〉
2.4.2.1 〈感情表出〉／ 2.4.2.2 〈意志表出〉
2.4.3 〈命令〉
2.4.4 〈演述〉
2.4.4.1 〈演述〉の全体像／ 2.4.4.2 〈描写〉と〈叙述〉／ 2.4.4.3 〈事象描写〉／ 2.4.4.4 〈状態描写〉／ 2.4.4.5 〈関係叙述〉と〈属性叙述〉／ 2.4.4.6 〈関係叙述〉／ 2.4.4.7 〈属性叙述〉
2.4.5 疑問文について
２．５　文機能論からの動詞分類再考 ―――― 111
2.5.0 本節の目的
2.5.1 状態動詞の下位分類
2.5.2 感情表出動詞は状態動詞か
2.5.3 時制・相と文機能からの状態動詞分類再考
2.5.4 状態動詞をめぐるその他の問題

第３章　形容詞文の機能論 ―――― 118
３．０　本章の概要 ―――― 118
３．１　形容詞文の意味と知覚の主観性 ―――― 118
3.1.0 本節の目的と出発点
3.1.1 「経験者」の存在
3.1.2 属性形容詞と感情形容詞を隔てるもの――知覚共有の信念

3.1.3 属性形容詞の意味論
3.1.3.1 対基準性／3.1.3.2 基準の主観性／3.1.3.3 科学的データへの経験付与／3.1.3.4 基準の設定法／3.1.3.5 比較表現における数値的基準
3．2 文機能論からの形容詞分類 ―― 130
3.2.0 本節の概要
3.2.1 先行研究の概観
3.2.1.1 感情形容詞と属性形容詞／3.2.1.2 感情形容詞と属性形容詞にまたがる語彙／3.2.1.3 中間的範疇――評価形容詞／3.2.1.4 状態形容詞と質形容詞
3.2.2 新たな形容詞分類
3．3 感情形容詞文の総論 ―― 140
3.3.1 〈感情表出〉の命題内容条件
3.3.2 情報帰属理論による感情形容詞文の記述
3.3.2.1 感情形容詞文による〈感情表出〉／3.3.2.2 感情形容詞文による〈状態描写〉（他者の感情描写）
3.3.3 本節のまとめと補足
3．4 情意形容詞文の文機能 ―― 146
3.4.0 本節の概要
3.4.1 属性的情意形容詞文による〈情意表出〉と〈属性叙述〉
3.4.1.1 経験の帰属空間と文機能の関連／3.4.1.2 対象型の属性的情意形容詞文／3.4.1.3 原因型の属性的情意形容詞文／3.4.1.4 経験者型の属性的情意形容詞文
3.4.2 状態的情意形容詞文による〈情意表出〉
3.4.3 動詞＋タイの構文について
3.4.3.1 タイはモダリティ形式か／3.4.3.2 タイ構文の文機能と発話機能／3.4.3.3 タイ構文の用例とまとめ
3．5 感覚形容詞文による〈感覚表出〉 ―― 159
3.5.1 情意形容詞文との意味・構文上の違い
3.5.2 感覚の対象についての意味論
3.5.3 感覚形容詞文の語彙・用例・文機能
3．6 属性形容詞文の文機能 ―― 164
3.6.1 経験の帰属空間と文機能の関連
3.6.2 属性形容詞文における経験者格の表示
3.6.3 属性形容詞文の構文・語彙・文機能のまとめ
3.6.3.1 属性形容詞の下位分類について／3.6.3.2 状態的属性形容詞文による〈状態描写〉と〈属性叙述〉／3.6.3.3 恒常的属性形容詞文による〈属性叙述〉／3.6.3.4 感覚的属性形容詞文による諸機能
3．7 関係形容詞文による〈関係叙述〉 ―― 178
3.7.1 関係形容詞文の構文的特徴
3.7.2 関係形容詞文の語彙・用例・文機能
3.7.2.1 対称的事物関係／3.7.2.2 非対称的事物関係／3.7.2.3 基準視点
3．8 描写形容詞文による〈状態描写〉 ―― 183
3.8.1 描写形容詞の特徴
3.8.2 描写形容詞文の語彙・用例・文機能
3.8.2.1 状態評価／3.8.2.2 情意描写／3.8.2.3 行為様態描写
3.8.3 本節のまとめ
第４章 感情動詞文の機能論 ―― 189
４．０ 本章の概要 ―― 189

4．1　感情動詞分類と感情表出動詞 ―― 189
4.1.1 文機能論からの感情動詞分類――感情表出・感情変化・感情描写――
4.1.2 意味特徴による感情動詞分類――思考・情意・感覚・知覚――
4.1.3 先行研究と課題
4．2　感情表出動詞の文法的特徴 ―― 194
4.2.0 本節の概要
4.2.1 〈感情表出〉の命題内容条件
4.2.2 感情動詞のアスペクト上の特徴
4.2.2.1 テイル形について／4.2.2.2 他のアスペクト形式の付加について／4.2.2.3 感情表出動詞のル形の時制意味
4.2.3 動詞による〈感情表出〉文のテンス・アスペクト上の特徴
4.2.3.1 動詞による〈感情表出〉文の状態性／4.2.3.2 時間的要素が引き起こす動作性
4.2.4 〈感情表出〉の文機能からの制約
4.2.5 〈感情表出〉と項構造――ヲ格を取らないこと
4．3　感情表出動詞文による〈感情表出〉 ―― 202
4.3.0 本節の概要
4.3.1 思考表出動詞文による〈思考表出〉
4.3.1.1 《情意表出》／4.3.1.2 《主張》／4.3.1.3 《意志表出》、《宣言》／4.3.1.4 《助言・忠告》／4.3.1.5 《依頼》
4.3.2 情意表出動詞文による〈情意表出〉
4.3.2.1 《情意表出》／4.3.2.2 《主張》／4.3.2.3 《対人的情意表明》
4.3.3 感覚表出動詞文による〈感覚表出〉
4.3.4 知覚表出動詞文による〈知覚表出〉
4.3.5 〈演述〉系の知覚状態動詞文について
4．4　感情変化動詞文による〈感情表出〉 ―― 213
4.4.1 感情変化動詞文が〈感情表出〉となるための条件
4.4.2 感情変化動詞のアスペクト的意味特徴
4.4.3 思考変化動詞文による〈思考表出〉
4.4.4 情意変化動詞文による〈情意表出〉
4.4.5 感覚変化動詞文による〈感覚表出〉

第５章　叙述動詞文の機能論 ―― 219
５．０　本章の概要 ―― 219
５．１　文機能論からの叙述動詞分類 ―― 219
5.1.1 時制と文機能による叙述動詞の範疇化
5.1.2 各下位分類の概略
5.1.2.1 可能動詞について／5.1.2.2 属性動詞について／5.1.2.3 所要動詞について／5.1.2.4 価値動詞について／5.1.2.5 関係動詞について
5.1.3 本節のまとめ
５．２　動詞文による〈属性叙述〉と超時時制 ―― 223
5.2.0 本節の概要
5.2.1 超時時制の定義
5.2.2 超時時制と動詞文
5.2.3 多発相
5.2.3.1 習慣的現在から多発相へ／5.2.3.2 頻度副詞の役割／5.2.3.3 〈属性叙述〉と多発相超時／5.2.3.4 一般者からの受身

5.2.4 潜在相
5.2.4.1 超時的真理から潜在相へ／5.2.4.2 叙述動詞における潜在相／5.2.4.3 条件節を用いた潜在相／5.2.4.4 補語（補部）を焦点とする潜在相／5.2.4.5 属性規定の連体用法
5.2.5 本節のまとめ

5．3 属性動詞文による〈属性叙述〉 236
5.3.0 本節の概要
5.3.1 属性動詞の文法的特徴
5.3.1.1 動詞文による〈属性叙述〉／5.3.1.2 程度副詞による修飾／5.3.1.3 有題文／5.3.1.4 属性規定的な連体用法との関連
5.3.2 属性動詞文の語彙・構文・用例
5.3.2.1 潜在能力／5.3.2.2 印象／5.3.2.3 嗜好・欲求／5.3.2.4「もうかる」
5.3.3 属性動詞文のアスペクト
5.3.3.1 潜在相と実現相の対立／5.3.3.2 テイル形——実現状態相
5.3.4 本節のまとめ

5．4 所要動詞文による〈属性叙述〉 249
5.4.1 状態動詞「要る」などをめぐる問題
5.4.2「要る」・「要する」の語彙的意味・構文的意味
5.4.3「要る」と「要する」の違い
5.4.4 所要動詞のテイル形
5.4.5 所要動詞の語彙・構文・用例
5.4.5.1 要する／5.4.5.2 掛かる／5.4.5.3 足りる／5.4.5.4 高くつく
5.4.6 状態動詞「要る」の構文

5．5 価値動詞文による〈属性叙述〉 259
5.5.0 本節の概要
5.5.1 価値動詞を定義する文法的特徴
5.5.2 価値動詞の意味特徴
5.5.3 価値動詞の語彙・構文・用例
5.5.3.1 値する／5.5.3.2 拘わる／5.5.3.3 限る／5.5.3.4 匹敵する／5.5.3.5 依る／5.5.3.6 準じる
5.5.4 他の叙述動詞との関係
5.5.4.1 関係動詞との関係／5.5.4.2 所要動詞との関係
補注 価値動詞「依る」の漢字について

5．6 関係動詞の文法的特徴 267
5.6.0 本節の概要
5.6.1 先行研究と問題提起
5.6.2 関係動詞の語彙の意味特徴
5.6.2.1 照合行為の関与／5.6.2.2 客観世界の変化動詞と主観世界の関係動詞
5.6.3 関係動詞のル形〈関係叙述〉とテイル形〈関係描写〉の対立
5.6.3.1 ル形の意味——超時的関係の叙述／5.6.3.2 テイル形の意味——照合行為の実現による関係描写／5.6.3.3 ル形とテイル形の差異を示す用例／5.6.3.4 ル形を持たない形状動詞
5.6.4 関係動詞の他のアスペクト・時制形態
5.6.4.1 関係動詞とアスペクト接辞／5.6.4.2 関係動詞のタ形
5.6.5 本節のまとめ
5.6.5.1 関係動詞の文法的特徴のまとめ／5.6.5.2「照合行為」の理論的背景／5.6.5.3 遂行分析・発話機能論への展望

５．７　関係動詞文による〈関係叙述〉 278
5.7.0 本節の概要
5.7.1 対称的関係動詞
5.7.2 非対称的関係動詞
5.7.2.1 直接事物関係／ 5.7.2.2 異集合間事物関係／ 5.7.2.3 静的因果関係／ 5.7.2.4 反規範的関係／ 5.7.2.5 比較優劣関係／ 5.7.2.6 包含・所有関係／ 5.7.2.7 記号関係／ 5.7.2.8 数量関係／ 5.7.2.9 位置関係（存在場所、仮の移動）
5.7.3 関係動詞の否定形
5.7.4 存在動詞文による〈存在叙述〉
5.7.5 語彙的意味として価値付与を行う関係動詞

第６章　授受動詞構文の機能論 296
６．０　本章の概要 296
６．１　授受構文の意味格構造 296
6.1.0 本節の概要
6.1.1 意味格を用いての構文分析
6.1.2 授受動詞構文と受益者格
6.1.3 授受補助動詞テアゲルとテクレルの構文
6.1.4 授受補助動詞テモラウの構文
６．２　授受構文の視点と人称 305
6.2.0 本節の概要
6.2.1 視点制約とその特性
6.2.2 授受構文の視点制約
6.2.3 授受構文の人称制限
6.2.4 本節のまとめ
６．３　授受構文による《指動》 313
6.3.0 本節の概要
6.3.1 名詞句の省略と人称
6.3.2 動詞＋テクレによる《依頼》
6.3.3 動詞＋テモラオウによる《要求》
6.2.4 動詞＋テモライタイの多機能性
6.2.5 本節のまとめ

結語 325

参考文献 329

用例出典 337

謝辞 339